

# ひょうごの遺跡

## 播磨国風土記と鉄



たたら製鉄は、幕末から明治にかけて西洋式製鉄法が導入されるまで、主に砂鉄を原料として鉄を生産した伝統的な製鉄法です。たたら製鉄法による鉄生産の開始は、弥生時代中期（約2,000年前）までさかのぼる可能性が指摘されていますが、弥生時代の確実な製鉄炉は確認されていません。

岡山県や広島県の中国山地では、6世紀後半から7世紀前半の製鉄炉が多数確認されており、この頃にはすでに我が国で鉄生産が行なわれていたことがわかっています。

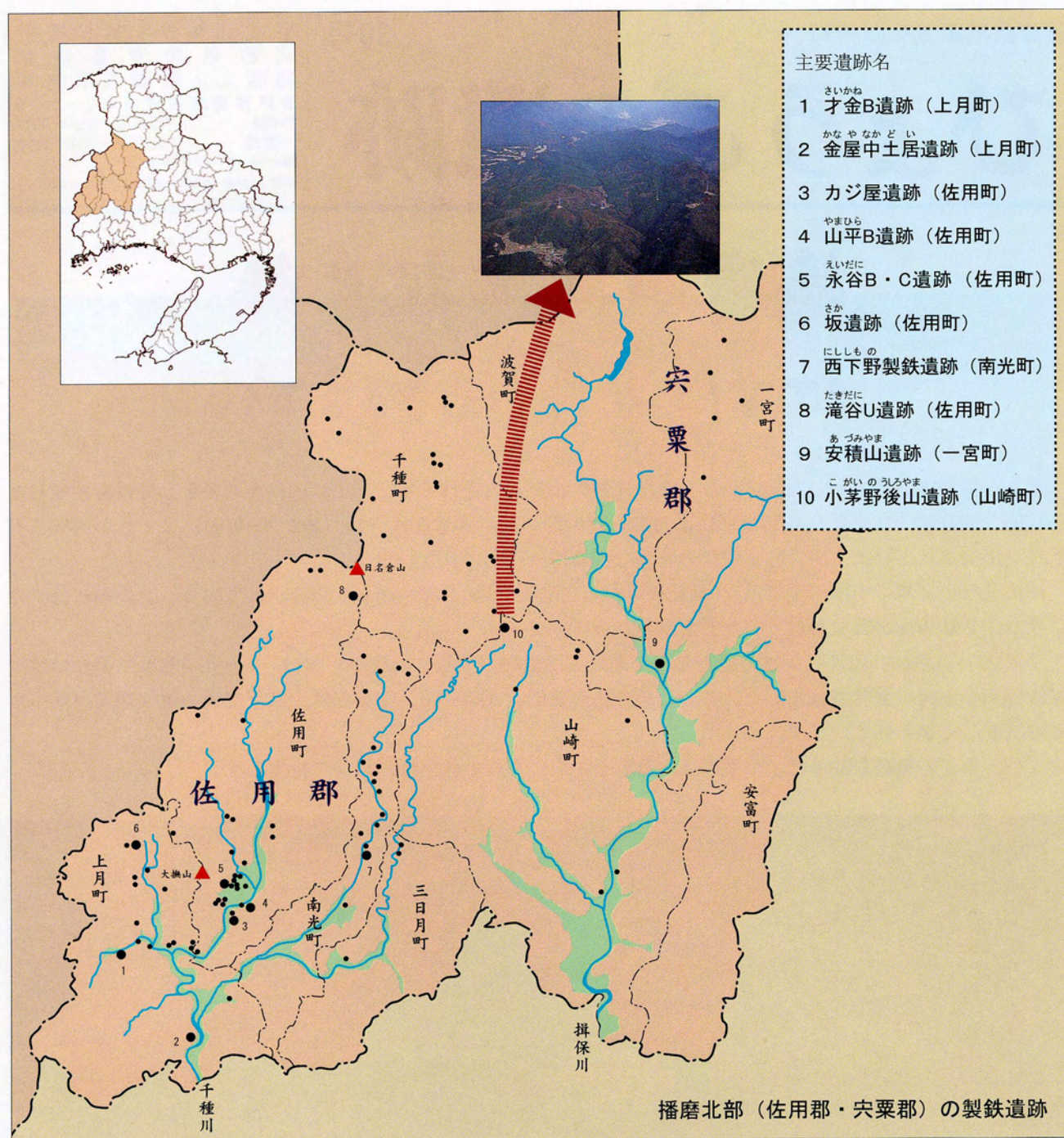
平成12年10月から12月にかけて調査した小茅野後山遺跡（<sup>こがいのうしろやま</sup>宍粟郡山崎町）では、4か所の地点で製鉄炉跡や製鉄関連の遺構が発見されました。この遺跡のある播磨北部の<sup>さようしそ</sup>佐用・宍粟郡は、県下で最も製鉄遺跡が集中する地域として知られています。

『ひょうごの遺跡』39号は、小茅野後山遺跡を中心に兵庫の鉄生産について特集します。



小茅野後山遺跡No. 6地点





## 播磨国風土記と鉄

奈良時代初頭（霊龜元年：715年）以前に編集されたとされている『播磨国風土記』に、製鉄を行っていたという記事があります。讃容の郡（佐用郡）にある鹿庭山（かにはやま）の谷で製鉄が行われており、難波の豊碕（とよさき）の朝廷（考徳朝：645～654年）に鉄を献上したとされています。鹿庭山は現在の大撫山にあたと考えられており、それを裏付けるように大撫山周辺にはたくさんの製鉄遺跡

が見つかっています。今のところ一番古い製鉄遺跡は奈良時代のもですが、『風土記』の記載からすると、7世紀代の製鉄遺跡が見つかる可能性があります。また隣の宍粟郡（宍粟郡）の敷草の里や御方の里で製鉄が行われていたという記事もあります。宍粟郡内では『風土記』の時期の製鉄遺跡は見つかりませんが、波賀町では中世から近世の製鉄遺跡が74か所もあり、古代にも製鉄が行われていたと考えられています。

このように播磨北部の山間地帯では、『風土記』の記事を裏付ける製鉄遺跡が、次々と発見されています。

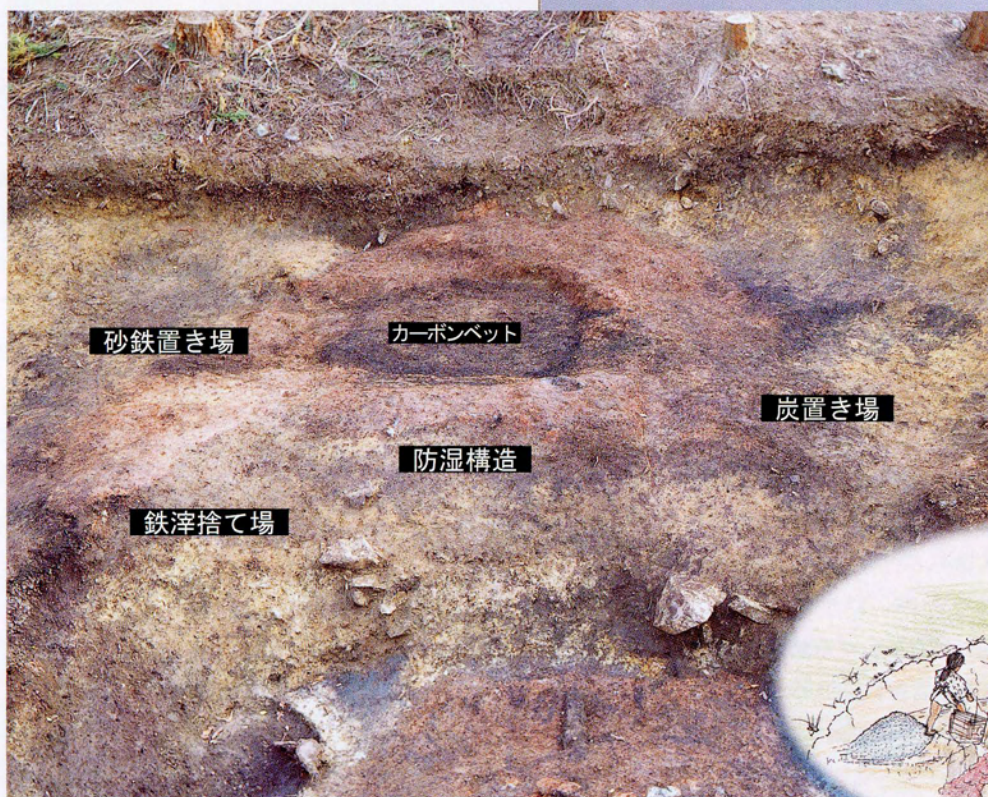


## 小茅野後山遺跡の製鉄炉

小茅野後山遺跡は宍粟郡山崎町の西北部にあります。小茅野の西側は宍粟郡千種町と境界を接しています。小茅野集落の周辺では、これまで4か所の製鉄遺跡が確認され、製鉄が行われていたことがわかっています。このたび一般県道大沢内海線の道路改良事業が計画されたのをきっかけに、路線内の確認調査をおこなったところ、新たに4か所の製鉄遺跡を発見しました。

このうちのひとつ、No. 6地点では製鉄炉の基礎部分が発見されました。製鉄炉は北向きの斜面に2段の平坦面を作り、そこにそれぞれ1基ずつ作られています（上段：炉2 [4.0×3.5m]、下段：炉1 [3.5×2.5m]）。製鉄炉は、操業のたびに炉体を壊して底に溜まった鉄の塊を取り出すため、炉の基礎部分と炉の底は一部残ることがありますが、炉全体が残ることはありません。今回発見された炉の基礎部分は、地面を焼いた後、その北側と南側に平行に炉壁片を堤状に並べ、その上に焼土を盛り上げ、マウンド（盛り上がり）を作っています。

### 炉2



炉1は、マウンドの中央にカーボンベツ（76×156cm）と呼ばれる炭が長方形に敷かれた部分があります。また、炉2のカーボンベツ（96×216cm）はわざわざ地面を掘り込み、その中に炭を敷いた構造のものがみつかっています。このカーボンベツの上に、箱型の炉が築かれたと考えられます。こうした構造の基礎部分は、地面からの湿気を遮断し、炉内の温度を安定させる働きがあると考えられています。炉1・炉2のマウンドの両脇には、原料の砂鉄と燃料の炭を集積した場所が確認されています。上段にある炉2の西側の斜面には、操業後取り壊した炉壁片を捨てた場所があり、東側の斜面には、鉄分の少ない鉄滓と焼土や灰を捨てた場所があります。これらの廃棄場は、炉1のある下段の平坦面の一部にまで広がっているため、炉2が炉1より新しく築かれたことがわかりました。

炉の操業時期は、土器が出土していないので、明らかにできません。近隣で調査された製鉄炉の調査などを参考にすると、平安時代後期までさかのぼるものではないかと考えられます。周辺の考古学的調査成果や放射性炭素年代測定法、考古地磁気年代測定法などの理化学的手法を使って操業時期を検討していきたいと考えています。





## 播磨北部の製鉄遺跡

製鉄とは、鉄鉱石や砂鉄に含まれる鉄を取り出す工程のことです。具体的には炉のなかで木炭を燃料にし、フイゴによって送風して鉱石や砂鉄を加熱する「たたら製鉄」が行われていました。

県内で最も多く製鉄遺跡が確認されているのは、佐用郡と宍粟郡にまたがる播磨北部の山間部です。これまでの研究で、佐用郡域の中央にある大撫山山麓周辺、東北部の南光町三河地区の千種川沿い、北端の日名倉山南麓地帯の3か所に製鉄遺跡が多く分布することが明らかになっています。

そのなかでも、南光町三河の千種川沿いにある奈良時代初め頃の西下野製鉄遺跡は、県下でも古い段階の製鉄遺跡として有名です。

また大撫山山麓には、永谷B・C遺跡、山平B遺跡など奈良時代～平安時代の製鉄遺跡が点在し、大撫山製鉄群遺跡と呼ばれています。この遺跡群の特徴は、チタン含有量の多い大撫山から採集される砂鉄を原料とした高チタンの鉄滓が出土することです。

佐用郡北部の日名倉山南麓周辺の製鉄遺跡は、標高600～700mの谷部に築かれているのが特徴です。この地域には平安時代後期と考えられている滝谷U遺跡があります。十数基の製鉄炉が丘陵に築かれていたと考えられている大規模な製鉄遺跡です。なかでもKテラスの製鉄炉の基礎部分は、小茅野後山遺跡とよく似ています。

今回紹介した小茅野後山遺跡は、この製鉄遺跡群に近く、標高も670mと高位にあるので、宍粟郡と佐用郡の郡境を越えて、日名倉山南麓製鉄遺跡群に含まれると考えてよいのかもしれませんが。

宍粟郡内では、一宮町の安積山遺跡が最も古く、平安時代末頃のものとされています。しかし『風土記』には御方里みかたのさとで鉄をつくったという記載があり、郡内で今後さらに古い製鉄炉が発見される可能性があります。

※土佐雅彦 『製鉄遺跡I』兵庫県生産遺跡調査報告  
第1冊 兵庫県教育委員会 1992



西下野製鉄遺跡（佐用郡南光町）



永谷C遺跡（佐用郡佐用町）  
（佐用郡教育委員会提供）



滝谷U遺跡（佐用郡佐用町）  
（佐用郡教育委員会提供）



安積山遺跡（宍粟郡一宮町）  
（一宮町教育委員会提供）



## 三二情報

(知っておきたい兵庫県の考古学)

## 弥生時代の鉄器

鉄もまたさまざまな文化と同じく、大陸から九州に伝わり、そして日本各地に広まりました。日本最古の鉄器は、北部九州の縄文時代晩期（約2,200年前）の遺跡から出土しています。大陸からの玄関口である北部九州は、弥生時代前期から多くの鉄器が使用されています。中期になると近畿付近にも普及し、後期になると、関東にまで達し、石器に取って代わります。

兵庫県で最古の鉄器は、詳細は明らかではありませんが、神戸市西区にある吉田遺跡からは弥生時代前期の土器を含む地層より出土した数点の鉄片があります。確実な例では同じく西区の新方遺跡の中期中頃（約2,100年前）の遺構から出土した鉄斧の破片です。この鉄斧は大陸ないしは朝鮮半島から輸入されたものです。中期後半（約2,000年前）になると、三田市の奈カリ与遺跡や有鼻遺跡が、鉄斧など多量の鉄器を保有する遺跡として知られています。とくに有鼻遺跡で出土した鉄剣は現在のところ近畿では最古です。また、三木市の与呂木遺跡や年ノ神遺跡では、住居跡から鉄鏃などが出土し、この段階でかなり鉄器が普及しつつある状況がうかがえます。

鉄器は条件によって劣化し、消滅するため、現在出土しているものが全てではありません。中期の遺跡からは、鉄剣を模倣した石剣、鉄器を研磨した可能性がある砥石、鉄斧を装着したであろう木柄などが出土しています。現在私たちが見ることのできる鉄器の他に「見えない鉄器」もかなりあったのでしょう。日本における鉄器の登場は、単に最先端のモノが伝わっただけでなく、弥生社会に与えた影響も大きいものでした。しかしその生産も含めて不明な点が多く、弥生時代の鉄器研究は、今後1点の遺物から新たな展開が生まれるかも知れません。

## 古墳時代の鍛冶

鍛冶には、鉄塊を加熱・鍛打して不純物を除去する工程（大鍛冶）とその鉄素材を使って鉄器をつくる工程（小鍛冶）があります。古墳時代には、政権



や有力豪族の支配下の鍛冶集団以外に、一般の集落にも童謡の「村の鍛冶屋」のような鍛冶工房があったと考えられています。淡路島の三原郡西淡町の雨流遺跡では、5世紀中頃の「村の鍛冶屋」の鍛冶工房が発見されました。鍛冶炉はみつかりませんが、椀形鉄滓と呼ばれる炉の底に溜まる鉄滓と羽口と呼ばれる土製のフイゴの送風管が出土しました。椀形鉄滓を分析したところ、大鍛冶で生じた滓と小鍛冶で生じた滓の両方があることがわかりました。このことは、当時一般集落の鍛冶工房まで、鉄を高度に加工する技術が伝わっていたことを示しています。5世紀中頃には、まだ日本で製鉄が行われていたことは証明されていませんが、少なくともこの頃には、鉄は一般の人々に身近な金属であったことが、この遺跡からわかります。



特別公開・講演会・学術座談会

# 『古代船団但馬に現る!』誌上報告会

第1弾（共催：兵庫県立文化体育館500名）

期間：平成12年10月11日～15日

会場：兵庫県立文化体育館ギャラリー&ホール

平成12年4月、出土品整理過程で発見された出石町袴狭遺跡出土の古代船団が描かれた線刻画木製品は、保存処理後の早期の公開が待たれていました。

高級アルコール法による保存処理が9月に完了したので特別公開を企画し、併せて線刻画木製品発見の意義を県民のみなさまとともに、講演会・学術座談会を企画し検討することにしました。



見学風景

特別公開は、ギャラリーで間近に木製品を見学していただき、多様な視点から古代船団に思いをはせていただきました。



講演風景

国立歴史民俗博物館佐原真館長をお招きし、「古墳時代の船の絵」と題して、絵の技法（多視点画）や、船に関する出土例（実物の船材・銅鐸絵画・木製品・船形埴輪・埴輪にある線刻画・土製品など）のお話をいただきました。4世紀初めと考えられる船団の絵のある線刻画木製品は、わが国で初めて出土したものです。描かれた船も、長大なものや今までにない船の形もあります。船を描く優れた技術を示すとともに、但馬の地と外洋を経て朝鮮半島へとつながる航海技術の存在や、但馬が海外との交流の先駆的な役割を担っていることも分かりました。



学術座談会風景

コーディネーターを佐原真館長にお願いし、神戸商船大学名誉教授松木哲氏が海事史を、ユネスコアジア文化センター奈良事務所の工楽善通氏が海を介しての交流をお話いただき、埋蔵文化財調査事務所中村弘主任が袴狭遺跡と線刻画木製品の発見の経緯の発表しました。会場の質問票の検討や絵画史の神戸大学東山明ご夫妻の参加もあり、線刻画の解釈や古代但馬における船団の意義を考えました。

第2弾（共催：出石町・出石町教育委員会230名）

期間：平成12年11月18日

会場：出石町文化会館館ひぼこホール

古代新羅の王子・天日槍伝承の地「出石」での開催となりました。袴狭遺跡から出土した線刻画木製品の公開と埋蔵文化財調査事務所からの報告二題「箱形木製品の再考」（藤田淳主査）、「船団線刻画木製品の発見」（中村主任）を行いました。弥生時代から現代に伝わる出雲地方の琴板を例示しながら、



ひぼこホール風景

芸術的にも非常に優れた絵画技法がみられる箱形木製品の絵の解釈を行い、船団線刻画木製品についても10月15日の座談会の成果を報告しました。会場は、古代但馬を想う熱い眼差しであふれていました。

文化庁主催2001『巡回展』出展へ！



# トライやる・ウィーク

「トライやる・ウィーク」とは、中学2年生を対象に、学校を離れて地域の様々な事業所で仕事を一週間行ない、その体験を通じて生きる力を育み、「心の教育」を推進することを目的とした活動です。今年度は11月に実施されました。

神戸市立夢野中学校の6人の生徒さんを迎えて、約一週間、文化財調査を体験しながら事務所の仕事を体験してもらいました。

## ○出土品整理Ⅰ

自然遺物・土器・木製品などの観察、土器の接合・復元

「土器の接合がなかなか見つからなくて大変だった。」  
「本物の遺物に触れて良かった。」「土器の接合、なかなか見つからなかったけど、1つくっつけた時はうれしかった。」

## ○現地調査（遺物見学）

上沢遺跡（神戸市兵庫区）の見学

「昔の土器や皿  
とかが発掘され、  
すごいと思った。」



土器の接合  
（兵庫津遺跡）



保存処理タンクから木製品の取り上げ

## ○出土品整理Ⅱ（出土遺物の保存処理）

木製品・金属製品の保存処理

「木製品の保存処理でタンクにつかっている木製品を取り上げるのがしんどかった。」

「不思議な形をした木製品があったので、何に使われたのかもっと調べてみたいと思いました。」

## ○兵庫区内の遺跡の調査

地図を片手に遺跡を調査

「近所に遺跡がいっぱいあったなんて知らなかった。」

「思っていたよりも兵庫に遺跡が多いことがわかったので実際に歩いて調べることは良いことだった。」

など、各作業について感想を寄せてくれました。



「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」  
シンポジウムの記録

ありふれた遺跡であっても、  
地域再生になくはない

「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」シンポジウム実行委員会

本書『震災を越えて』は、一昨年（平成11年12月4日）に行なった「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」シンポジウム（会場：神戸市長田区ピフレホール）の当日記録を中心にまとめた出版物です。

この『震災を越えて』では、遺跡や遺物といった「埋蔵文化財」をキーワードとして、埋蔵文化財の発掘調査に携わった者はもちろん、各界の学識経験者や一般県民など、多種多様な立場から、これまで語られることの無かった貴重な意見や提言を集約する事が出来ました。

今後、どこかで起こるであろう大規模な自然災害の復旧・復興に際し、この『震災を越えて』が、災害時における埋蔵文化財調査の手引書・教科書になってくれればという期待を込めて編集し、一人でも多くの方々に読んでいただけることを願って発行します。

A5判横組 208頁 ￥2,000（税別）

編著者：「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」シンポジウム実行委員会

問い合わせ先：株式会社エビック TEL078-241-7561



# ホームページ

隨時更新

Home Page

[menu](#)

## 兵庫県埋蔵文化財情報

# ひょうごの遺跡

## 中世の海外貿易

[illegible]

紙面で配布しております  
情報誌をそのまま掲載し  
ています。また、既に絶  
版となったバックナンバー  
の掲載も行っています。

## 現地説明会の案内

現地説明会の開催場所や時間のほかに、説明会を行う遺跡についての概要も掲載しています。現地説明会前に一度チェックされると、現地説明会で遺跡を見る視点がより広がるかもしれません。



## 現地説明会耳より情報

木・金曜日くらいに週末の現地説明会の案内が掲載されますので、現地説明会情報を知りたい方は要チェックです。

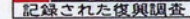
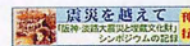


文化財愛護シンボルマーク



兵庫県教育委員会

最新更新日期2000年1月23日


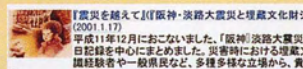


埋藏文化財調査事務所

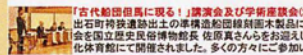
Buried Cultural Properties Research Office,  
Hyogo Prefectural Board of Education

## 最新トピックス

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を行っている遺跡や当事務所にに関する情報を随時お知らせしています。

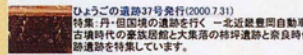


「古代船国領馬に現る！」神狭遺跡出土絵刺木  
11月18日(土)に出石町ひびこホールにおいて、出石  
刺木製品の緊急特別公開および当事務所職員に  
人々を招く多くのみなさまに、ご参加いただき、あは



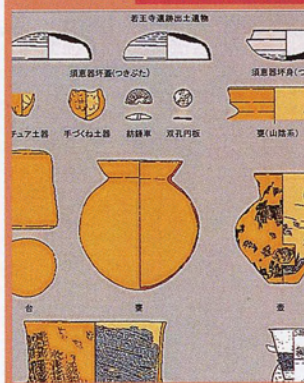
ひょうごの遺跡38号発行(2000.9.30)

特集：古代船国徳島に現る！ 一田舎郡田舎町で得た  
弥生時代～古墳時代前半の溝から出土した、準備品  
詳しく報告しています。



平瀬遺跡・円光寺遺跡・円光寺古墳(佐用郡上月町)  
平瀬遺跡では13~15世紀の村の跡を、円光寺遺跡

## 現地説明会資料



現地説明会へ行けなかつた人へ朗報。現地説明会資料は現地説明会でのみ配布しておりますが、より多くの方にお知らせできるように現地説明会資料を掲載しております。

コンテンツはこの他にもまだまだあります。今後、さらに内容の充実を予定していますので、是非、一度当事務所のホームページを覗いてみてください。

Go!ACCESS ►

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

記 後 集 編

新世紀初の『ひょうごの遺跡』は、かつての最先端の技術である鉄の生産技術の特集で始まり、IT社会の現代の技術であるホームページの記事で締めくくる構成となりました。私たちの仕事は、煎じ詰めれば、過去の遺産を意義づけることによって、現在や未来を考えるということになるのでしょうか。